

## 注視の実現にヘリウム風船が有効だった1例

○鳥居 みゆき<sup>1</sup>、和田 哲也<sup>1,2</sup>、岩井 香織<sup>1</sup>、堺田 麗加<sup>1</sup>、楨林 優<sup>1</sup>、浅野 好孝<sup>1,2</sup>、篠田 淳<sup>1,2</sup>

<sup>1</sup>木沢記念病院 中部療護センター、<sup>2</sup>岐阜大学連携大学院脳病態解析学分野

【はじめに】意識障害患者の視覚機能はJFK Coma Recovery Scale-Revisedによると、視覚的な驚き反応 (Visual Startle)、注視、追視、目標に手を伸ばす、物品を認識できる (Object Recognition) という段階で評価される。注視の獲得は手と目の協調など他の機能改善にも繋がることであり、注視が不可能な患者に対して作業療法を行うことは困難である。今回、感覚性失語を有する注視困難患者に対し、ヘリウム風船を用いたことで注視が可能となったので報告する。

【症例】68歳、女性、交通事故にて受傷。外傷性くも膜下出血、脳室内出血を認め、保存的治療を実施。受傷8ヶ月後、リハビリ目的で当センターへ入所。後遺症は、左片麻痺、感覚性失語。コミュニケーション能力として指示理解・意思表示は困難。視覚機能は、視覚的な驚き反応が観察されたが、注視困難であった。

【訓練方法・経過】症例の右手掌面にヘリウムと空気を混合し落下速度を遅くしたヘリウム風船 (直径約30cm) を乗せ、落ちないように右上肢でバランスを取らせることでヘリウム風船への注視を促した。開始当初は、注視時間2秒間であったが、徐々に注視時間が延長し、現在7秒間程度可能となった。しかし、現在でもその他の物品に対する注視は認められない。

【まとめ】本症例は言語理解が困難なため風船を落とさないように右上肢を調整、注視するのは指示理解での反応ではなく、視覚情報からヘリウム風船といった動的対象を捕捉する原始的な反応が反映した結果と考えられ、注視困難症例に対してヘリウム風船は有用な方法であることが示唆された。